

「群馬の万葉歌」

群馬県立女子大学 北川和秀

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 — 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <u>上野 22首</u> 下野 2首 陸奥 3首	
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <u>上野 3首</u> 陸奥 1首	東海道 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

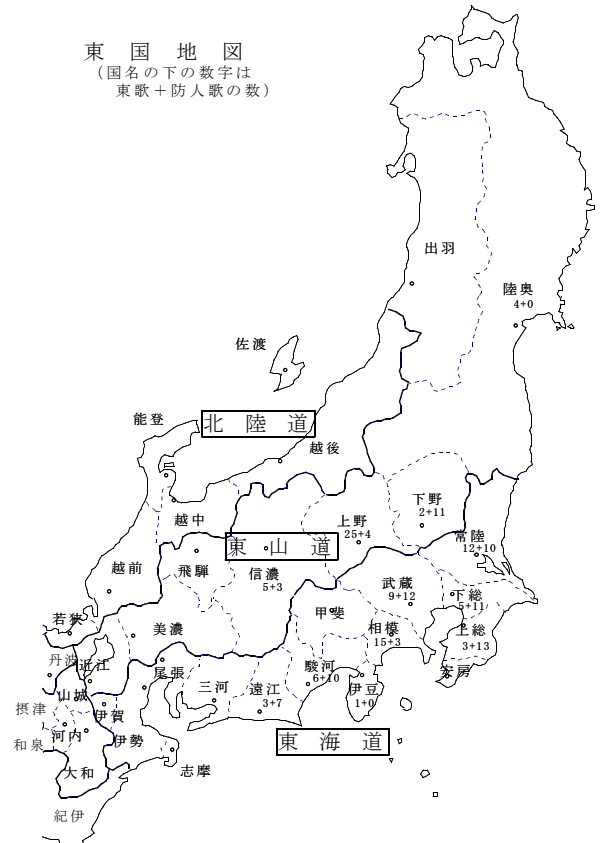
遠江国	7首 / 18首
相模国	3首 / 8首
駿河国	10首 / 20首
上総国	13首 / 19首
常陸国	10首 / 17首
下野国	11首 / 18首
下総国	11首 / 22首
信濃国	3首 / 12首
<u>上野国</u>	<u>4首 / 12首</u>
武蔵国	12首 / 20首

84首 / 166首

- ②昔年防人…………… 8首
- ③昔年相替防人……… 1首

合計 93首

東国地図  
(国名の下に数字は東歌+防人歌の数)



## 【碓氷】

3402 日の暮ぐれに碓氷うすひの山を越せゆる日は夫せなの袖そでもさやに振ふらしつ（上野東歌）  
（碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになった）

4407 ひな曇くもり碓氷うすひの坂を越こえしだに妹いもうとが恋こひしく忘わすれぬかも（上野防人歌）  
右の一首は、他ほか田た部ぶ子こ磐い前まへのなり。  
（碓氷峠を越えるとき、彼女への思いが募って、もう忘れるなんてとてもできないことだなあ）

## 【伊香保】

3421 伊香保いかけほ嶺ねに雷かみな鳴なりそね吾わが上へには故ゆゑはなけども子こらによりてそ（上野東歌）  
（伊香保の峰に雷よ鳴ってくれるな。私にとっては別にどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね）

### \* 「伊香保」の語源

- ・現在の「伊香保」は渋川市の町名。旧伊香保町。
- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか（巖）＋ほ（穂・秀）」と考えられる。
- ・「ほ（穂・秀）」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎（ほのほ）」は「火の穂」の意。ろうそくの炎の形は槍の穂とよく似ている。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じと考えてよい。
- ・「いか（巖）」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」（『古典古語辞典』の「いかづち【雷】」の項）を表す語で、「いかし（巖し）」「いかめし（巖めし）」「いかる（怒る）」「いかづち（雷）」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか（巖）」は、この山のもつどのような性格を「いか（巖）」にとらえたのであろうか。

- ・山の姿
- ・雷の巣窟
- ・火山

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾あが恋のみし時なかりけり（上野東歌）  
（伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言うが、私あがあなたを思う恋心ばかりは止むときがないことだ）

- \* 参考「韓からどまり亭のこ能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（3670）  
「荒津あらつの海潮しほひ干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」（3891）

3423 上毛野伊香保いかけほの嶺ねろに降ふる雪よきの行き過ぎかてぬ妹いもうとが家のあたり（上野東歌）  
（上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではないが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ）

- \* 参考「わが屋戸やどの君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」（1041）

3414 伊香保<sup>やさか</sup>の八尺<sup>みで</sup>の井手<sup>のじ</sup>に立つ虹<sup>あらは</sup>の 頭<sup>あ</sup>ろまでもさ寝<sup>ね</sup>をさ寝<sup>ね</sup>てば（上野東歌）  
（伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはっきりと見えるように、そのようにはっきりと二人の仲が明らかになってしまうほど一緒に寝ていられたらなあ）

【佐野】

3420 上毛野<sup>ふなはし</sup>佐野<sup>はな</sup>の舟橋<sup>さ</sup>取り放<sup>わ</sup>し親<sup>さか</sup>は離<sup>さ</sup>くれど吾<sup>わ</sup>は離<sup>さか</sup>るがへ（上野東歌）  
（上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離すけれど、私はあなたと離れたりしない）

【多胡】

3403 吾<sup>あ</sup>が恋<sup>まさか</sup>は現在<sup>ま</sup>もかなし草枕<sup>たご</sup>多胡<sup>いりの</sup>の入野<sup>おく</sup>の将来<sup>お</sup>もかなしも（上野東歌）  
（私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないことだ）

\* 参考

「……三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す。……」

（多胡碑 七一年）

昭和三十年まで存在した入野村は、明治二十二年の町村合併の折、小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して成立。村名は、東歌の「多胡の入野」が黒熊附近に比定されるという説を採用して命名された。

【丹生】

3560 真金<sup>まかね</sup>吹<sup>に</sup>く丹生<sup>まそほ</sup>の真朱<sup>で</sup>の色<sup>あ</sup>に出<sup>あ</sup>て言<sup>あ</sup>はなくのみそ吾<sup>あ</sup>が恋<sup>あ</sup>ふらくは（未勘国東歌）  
（丹生の赤土のように、はっきりと表に出しては言わないだけだ。私が恋しているという事は）

\* 参考「白真砂<sup>しらまなご</sup>御津<sup>みつ</sup>の埴生<sup>はにふ</sup>の色<sup>あ</sup>に出<sup>あ</sup>て言<sup>あ</sup>はなくのみそ我<sup>あ</sup>が恋<sup>あ</sup>ふらくは」（2725）

【利根川】

3413 利根川<sup>ただ</sup>の川瀬<sup>ただ</sup>も知ら<sup>ただ</sup>ず直渡<sup>ただ</sup>り波<sup>ただ</sup>にあふのす会<sup>ただ</sup>へる君<sup>ただ</sup>かも（上野東歌）  
（利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなただこと）

【その他】

3405 上毛野<sup>かみつけの</sup>乎度<sup>を</sup>の多杼里<sup>たどり</sup>が川路<sup>た</sup>にも子<sup>た</sup>らは逢<sup>た</sup>はなも一人<sup>た</sup>のみして（上野東歌）  
（上野国の乎度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで）

3405或本<sup>かみつけの</sup> 上毛野<sup>を</sup>小野<sup>の</sup>の多杼里<sup>たどり</sup>が安波治<sup>あはぢ</sup>にも夫<sup>せ</sup>なは逢<sup>た</sup>はなも見<sup>た</sup>る人<sup>た</sup>なしに（上野東歌）  
（上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで）

3540 左<sup>さわ</sup>和多里<sup>たり</sup>の手児<sup>てご</sup>にい行き逢<sup>あ</sup>ひ赤駒<sup>あが</sup>が足搔<sup>あ</sup>きを速<sup>こと</sup>み言<sup>こと</sup>問<sup>き</sup>はず来<sup>き</sup>ぬ（未勘国東歌）  
（左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないまま来てしまった）

3494 <sup>こもちやま</sup>子持山<sup>わかかへるで</sup>若鶏冠木<sup>もみ</sup>の黄葉<sup>つ</sup>つまで寝もと<sup>わ</sup>吾は思ふ<sup>な</sup>汝は<sup>あ</sup>何<sup>も</sup>どか思ふ（未勘国東歌）  
（子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしたいと私は思う。あなたは どう思う？）

3416 上毛野<sup>かほや</sup>可保夜<sup>が</sup>沼<sup>の</sup>のいは<sup>つら</sup>ゐ蔓引<sup>か</sup>ばぬれ<sup>あ</sup>つつ吾<sup>を</sup>をな絶え<sup>そ</sup>ね（上野東歌）  
（上野国の可保夜の沼のイハキツラが、引っ張ればずるずると寄って来るように、私に寄ってきて、いつまでも仲を絶やさないうで欲しい）

\* 参考「入間路<sup>いりまぢ</sup>の大家<sup>おほや</sup>が原<sup>の</sup>のいは<sup>つら</sup>ゐ蔓引<sup>か</sup>ばぬ<sup>る</sup>ぬ<sup>る</sup>吾<sup>を</sup>にな絶え<sup>そ</sup>ね」（3378）

武蔵国東歌

「西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも<sup>かほ</sup>甲波<sup>すく</sup>すくねの社を見やりたるは、これなん光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。……名に高き<sup>かほや</sup>かほやが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては佛すらなくなりしうへ、また其地さへぞうせはてたる。」（<sup>な</sup>奈<sup>さ</sup>佐<sup>かつ</sup>勝<sup>たか</sup>阜『山吹日記』天明六年1786五月十三日条）

\* 「うのとしのわざはひ」は天明三年1783の浅間山の大噴火によってもたらされた災害

#### 【上野国東歌】

4404 <sup>なにはち</sup>難波道<sup>く</sup>を行きて来までと<sup>わ</sup>吾妹子<sup>こ</sup>が着けし紐<sup>を</sup>が緒絶え<sup>に</sup>けるかも（上野防人歌）

右の一首は、<sup>すけのよぼろ</sup>助<sup>うしかひ</sup>丁上毛野牛甘<sup>の</sup>なり。

（難波への道を無事に行き帰ってきてくださいと言って妻が縫い付けてくれた紐がついにすり切れてしまったことだなあ）

4405 <sup>いもこ</sup>わが妹子<sup>が</sup>がしぬひにせよと着けし紐糸<sup>にな</sup>るとも<sup>わ</sup>吾は解かじとよ（上野防人歌）

右の一首は、<sup>ますひと</sup>朝倉益人<sup>の</sup>なり。

（妻が、思い出すよすがにしてほしいと言って縫い付けてくれた紐は、たとえすり減って糸になっても私はほどいたりするものか）

4406 <sup>いは</sup>わが家<sup>ろ</sup>に行かも<sup>人も</sup>が草枕旅<sup>は</sup>苦しと告げ遣<sup>ら</sup>まくも（上野防人歌）

右の一首は、<sup>ふし</sup>大伴部節麻呂<sup>の</sup>なり。

（わが家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、私が苦しい旅をしていると家族に知らせてやれるのに）

4407 <sup>くも</sup>ひな曇<sup>うすひ</sup>り碓氷<sup>の</sup>坂を越えしだに妹<sup>が</sup>が恋しく忘らえぬかも（上野防人歌）

右の一首は、<sup>をさだべのこいはさき</sup>他田部子磐前<sup>の</sup>なり。

（碓氷峠を越えるとき、彼女への思いが募って、もう忘れるなんてとてもできないことだなあ）前掲